THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES

日本国際文化学会

http://www.jsics.org

ニューズレター

第 23 号

2012 年 9 月 29 日　発行

日本国際文化学会事務局

〒 253-8550

神奈川県茅ヶ崎市行谷 1100

文教大学国際学部

山脇千賀子研究室

【報告】日本国際文化学会第 11 回全国大会

大会実行委員長　岡　眞理子（青山学院大学）

2012 年 7 月 7 日（土）、8 日（日）の両日、日本国際文化学会の第 11 回全国大会が、1 日目は六本木の国際文化会館にて、2 日目は渋谷の青山学院大学にて開催された。のべ参加者数は、およそ会員 90 名、非会員 30 名を数えた。これは、参加者による参加費、学会事務局からの大会運営費に加えて、青山学院大学の「学術研究団体開催補助金」によりスムーズな実現に至ったものである。

特に、7 日の午後に国際文化会館、東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター、青山学院大学総合文化政策学部との共催で行われた特別シンポジウム「災害と言葉、そして言葉と災害」では、論壇で活躍する思想家兼編集者、芥川賞作家、障害学の社会学者を迎え、3.11 の震災以後、言葉への信頼を取り戻すために何をすべきかについて、川村 湊会員の司会により、それぞれの立場から語っていただいた。

東 浩紀さんは信頼に値する言葉を具体的にはだれにどう届けるのかを問題提起し、同じ現象の前で人々の語り方が違っているという亀裂・不信の時代のなかで、社会全般のメディア・リテラシーが上がっていることを指摘され、平野 啓一郎さんは猛スピードで情報処理されるインターネットの言葉に対し、遅さと重みによって反復的、継続的に磁場を作っていく文学の言葉が必要であると述べられ、星加 良司さんは弱者に序列を付けるようなトリアージュ的思考の危険を緩和するあるいは相対化するリテラシーを育て、生きることが困難になる人々を生まない社会にすることを強調された。出席者のアンケートでは、深く考えさせられたとの感謝の言葉が多く聞かれ、国際文化会館だけでなく、本学会でもかつてなかったことであるが、翌日のツイッターでかなりリツイートされていたらしい。

シンポジウム参加者数は、国際文化会館の会員、バリアフリーセンターからの広報なども奏功し、120 名を超える盛況であった。バリアフリーセンターの文字通訳の方々が、話し言葉を同時書記してスクリーンで見せるという、聴覚障害の方々向けのサービスを提供してくださったが、その速さはほとんど同時といってもよく、健常者である私たちにも、話の内容を省察するのに大いに役立った。今回の特別シンポジウムが充実した内容となったのは、ひとえに国際文化会館の降旗 高司郎常務理事、企画部シンポ担当の園田 公博様、出版担当の宇野 麻子様、宴会・設備担当の田崎 秀樹様、東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター　下山 晴彦センター長、月村 きよみ様のご協力があってのことであり、この場を借りて改めて御礼申し上げたい。なお、シンポジウムの概要は『インターカルチュラル』第 11 号に掲載される予定である。

自由論題は例年よりやや少なくて 4 セッション、共通論題は 7 セッションあり、特に、共通論題 3「日米交流誌の再検討―非国家主体に注目して」は、討論者に五十嵐 武士先生を迎え、国際文化会館での開催にふさわしいテーマとなった。また、共通論題 4「現代に生きる能楽―内と外の視点による事例と検討」では、外国人研究者の参加のほうが多いといううれしい現象も生まれた。

情報交換会は、国際文化会館の雨にぬれた美しい庭を背景に、院生や学生も含め 60 名近い出席者を集め、シンポジウムのパネリストもご一緒に、おいしいビュフェに話が弾んた。その際、皆様にご紹介したが、本大会は会場が 2 か所という変則的な開催となったので、学会の中で常任理事会に付属する形で、開催のための実行委員会を形成した。早稲田大学の都丸 潤子会員（会場運営）、東京大学の白石 さや会員（特別シンポジウム企画）、成蹊大学の川村 陶子会員（要旨集、シンポジウム席上配布資料編集）、学会事務局長の山脇 千賀子会員（学会事務局との連携）、それに青山学院大学の岡（大会参加票、会計、会場手配等取りまとめ全般）で、数回会合を開くとともに、メールを共有し、それぞれの分担を有機的につなげるべく努めた。特に、実行委員会には、早稲田大学から加藤 恵美会員、成蹊大学から趙 貴花会員、青山学院大学から~~ティール~~白川 俊介会員が有能な補佐として参加くださり、事前の細かい作業、当日の会場運営等をお願いできたのは幸いであった。もちろん、早稲田大学と青山学院大学の院生、学生たちの当日の活躍も特筆に値する。

2日目午後の総会の後に、最後のプログラムとして開催されたフォーラム「学会認定資格創設の必要性と課題－国際文化学の学士力の可視化に向けて」については、これまでも全国大会でのフォーラムや、学会が主催する全国国際文化学部・学科の情報交換会で討議されてきたテーマの発展上にある課題であるが、このたびは具体的に一歩進めて、本学会の主導による「文化創成コーディネーター資格（仮称）」の創設について、佐賀大学の吉岡 剛彦会員が中心となって提案し、広く討議に付された。そのなかで、木原 誠会員、岩野 雅子会員と、青山学院大学総合文化政策学部杉浦 勢之学部長が報告を行った。国際文化学の中身は本質的に可視化できないのではないか、学会認定という専門性の高いレベルと学士力は矛盾ではないか、などという反対の意見に対して、インターカルチュラルという概念を次世代のためにどう制度化できるかが重要である、教員間の共通理解を生み、学生にとっても企業にとってもマッチングに役立つ、インターンシップや留学などの異文化体験という視点なら共有化が可能、など30名を超える会員により熱心な意見交換がなされた。詳しい内容は『インターカルチュラル』第11号に掲載される予定である。

最後に、これらすべてを温かく見守り、適切なアドバイスを下さった若林 一平会長に、心からの感謝を表し、第11回全国大会の報告としたい。

日本国際文化学会第11回会員総会
新会長（2013－2014年度）に白石さや氏を選出　ほか重要案件審議

報告：会長　若林一平

2012年7月8日、青山学院大学において第11回会員総会が開催された。以下に議事内容を要約し報告する。

●第1号議案　2011年度事業報告

学会創立10周年記念特別シンポジウムほか

名桜大学で開催された特別シンポジウム、全国大会、文教大学で開催された秋季大会などについて報告があった。

●第2号議案　2011年度収支報告ほか

国際交流基金助成200万円、寄付金総額692,400円

総額4,612,295円の一般収支報告、総額3,770,850円の創立10周年シンポジウム特別会計報告及び総額1,413,532円の創立10周年記念基金会計報告が行われた。特筆すべきは国際交流基金からの助成200万円、平野健一郎顧問・創立会長からの寄付50万円を含め寄付金総額が69万余円に達したことである。これらが10周年事業の原資となった。あらためて御礼申し上げます。

全体として監査報告書により承認された。

●第3号議案　2012年度事業計画・予算

「文化創成コーディネーター」教育プログラム検討ワーキンググループ発足

木原誠担当常任理事から趣旨説明があり。即日施行し、1年を目途に結論を出すこととした。

【内規抜粋】

（目的）

第1条　この規程は、日本国際文化学会規約第13条の規定に基づき設置する「文化創成コーディネーター」教育プログラム検討ワーキンググループ（以下、教育WGという）の運営に関して必要な事項を定めることを目的とする。

（資格WGの設置）

第2条　教育WGは、日本国際文化学会規約第13条に基づき、常任理事の提案により理事会の承認を経て、「文化創成コーディネーター」教育プログラムとそれを修めることを証する資格制度の創設を目的として設置される。なお、教育WGは設置してから1年後を目途に結論を得て任務を終了することとする。

『インターカルチュラル』査読規定の改定

査読規定に「再査読」を含めることとした。施行は2013年度からとし、『インターカルチュラル』第12号への投稿から適用される。

【新規定（修正箇所）】

（掲載原稿の決定）

第20条　編集委員会は、掲載原稿を決定する場合には、しかるべき専門家2名に査読を依頼し、その意見を聴取しなければならない。

2　執筆者が大学院・学部の学生である場合には、前項の査読者は、執筆者の指導教授以外の者でなければならない。

第21条　編集委員会は、掲載希望原稿の掲載を断る場合には、その理由を文書により具体的に説明しなければならない。

2　上記の理由に関する学術的な問題点があると判断した場合には、投稿者は編集委員会に対して再査読を要求することができる。編集委員会は、最初の査読時とは異なる専門家2名に査読を依頼し、その意見を聴取した後、再度掲載について審議し、その結果を投稿者に伝える。再査読は一度のみで、これをもって掲載に関する最終的な結論とする。

（下線部を現規定に追加）

●第4号議案　2013～2014年度新役員選任

白石さや会長、常任理事・理事を選出

新理事選挙をふまえて白石さや会長ほかの新役員を選出した。なお、次の方々には総会時点で未定となっていた役職を含んでおり、全役員の承認は次年度の会員総会となる。

【2013～2014年度新役員】

顧問・創立会長

平野 健一郎（早稲田大学／東京大学　名誉教授）

顧問

松井 賢一（(財) 日本エネルギー経済研究所　参与）　熊田 泰章（法政大学国際文化学部）　若林 一平（文教大学名誉教授）

常任理事・会長

白石 さや（東京大学大学院教育学研究科）

常任理事・副会長

小林 文生（東北大学大学院国際文化学研究科）　岡 眞理子（青山学院大学総合文化政策学部）

常任理事・『インターカルチュラル』編集長　川村 湊（法政大学国際文化学部）

常任理事

岩野 雅子（山口県立大学国際文化学部）　植野 雄司（プール学院大学国際文化学部）　遠藤 央（京都文教大学人間学部）　川村 陶子（成蹊大学文学部）　木原 誠（佐賀大学文化教育学部）　寺田 元一（名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科）　松居 竜五（龍谷大学国際文化学部）　山岡 道男（早稲田大学アジア太平洋研究所）　山脇 千賀子（文教大学国際学部）

理事

小川 忠（独立行政法人国際交流基金）　片桐 庸夫（群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部）　岸 清香（都留文科大学文学部比較文化学科）　木下 資一（神戸大学国際文化学部）　斎藤 文彦（龍谷大学国際文化学部）　佐々木 英昭（龍谷大学国際文化学部）　芝崎 厚士（駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部）　清水 耕介（龍谷大学国際文化学部）　嵩 満也（龍谷大学国際文化学部）　田村 栄子（元佐賀大学教育学部）　都丸 潤子（早稲田大学政治経済学術院）　鳥飼 玖美子（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科）　萩原 稔（大東文化大学法学部）　長谷川 雄一（東北福祉大学総合福祉学部）　堀内 直哉（目白大学人文学部）　松林 正一郎（多摩大学グローバルスタディーズ学部）　吉岡 剛彦（佐賀大学文化教育学部）

幹事

ウィルソン・エイミー（山口県立大学国際文化学部）

監査役

飯森 明子（常磐大学国際学部）　安野 早己（山口県立大学国際文化学部）

以上

●報告事項

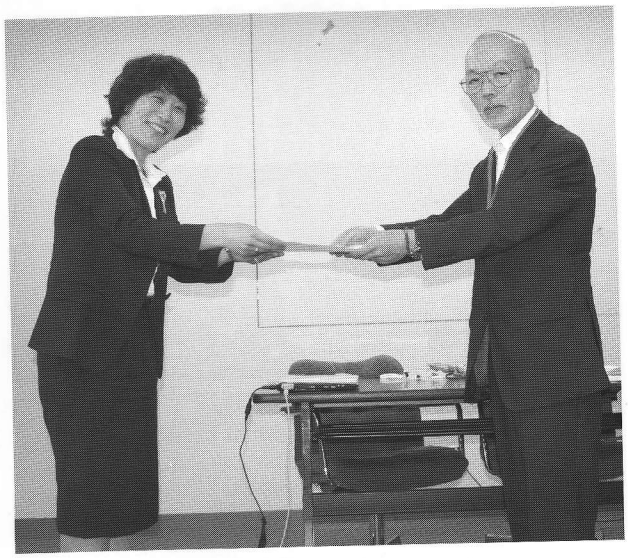
平野健一郎賞受賞者ほか

第2回　平野健一郎賞授賞の報告

第2回平野健一郎賞が川村陶子の論文「「移民国」ドイツを揺るがしたザラツィン論争―多様性の多次元性、文化間対話の可能性」－その克服に向けて」（『インターカルチュラル』10号掲載）に授賞された。

平野健一郎賞選考委員会における授賞理由は以下のとおりである。

2010年に出版された『自壊するドイツ』をめぐる諸言説の再構成とその問題系の分析を通じて、文化間対話の可能性を追求した論考である。実際には多次元的であるはずの文化の多様性が、いかに単純化され二項対立に回収されていくかについて言説分析が行われている。評価すべきは、少なくとも3つの次元（1移民統合―社会問題　2表現の自由―権利問題　3少子化―人口問題）で言説が形成されるべき論点が、移民民統合問題に集約され、しかも「マジョリティ・ドイツ人」対「移民」の二項対立へと単純化され回収されていくプロセスを鮮やかに分析した点である。最近のドイツにおける文化的言説状況をいち早く分析し、異なる次元における文化的多様性に着目した論考は国際文化学の発展に寄与するものである。



若林会長から賞状を受け取る川村陶子氏（左）

【寄稿】　オタコン2012：ボルチモアのアニメ・コンベンション報告

白石さや
東京大学大学院教育学研究科

2012年7月27日（金）から29日（日）までの3日間、米国メリーランド州ボルチモアのボルチモア・コンベンション・センターにおいて、第19回オタコン（OTAKON：Convention of the Otaku Generation）が開催され、私も参加した。日本のマンガやアニメの拡散に伴い、世界各地でアニメ・コンベンションが開催されるようになり、空間と時間を超えたネット文化としてのアニメを共有する人々が、この時ばかりは文字通り一堂に集い「ファンダムの祭典」を楽しむ。

1975年に東京で始まったコミックマーケット（通称「コミケ」）は世界最大規模で、東京国際展示場（日本最大のコンベンションセンター）を借切り、3日間で60万人近くの参加者を集める。米国では大小さまざまのアニメ・コンが各地で開催されており、年間で70前後あるとされる。その中で全米第一の規模を誇るのがカリフォルニア州で1992年以来開催されているアニメ・エキスポ（Anime Expo, or AX）である。コミケの中心は同人誌即売会であるが、世界のアニメ・コンはそれぞれに個性をもち、アメリカではSFコンベンションの伝統を受け継いでいると聞く。それでも関連グッズを売るブースが並び、会場ではコスプレの服装をした人々が溢れ、創造・流通・消費のそれぞれの局面に携わる人々が直接に顔を合わせて交流する場であるという共通点をもつ。

オタコンは全米第二のアニメ・コンであり、東海岸では最も長い歴史をもち、1994年以来、献身的な代々のボランティアによって企画運営されてきた「ファンによる、ファンのための（By fans, for fans）」祭典として筋金入りの正統派である。第一回の参加者約350人（ボランティア・スタッフ16人）以来、毎年規模を拡大し続け、今年はおよそ3万2千人のファンが、各々80ドルの登録料を払って参加した。その多くは会場周辺のホテルに泊まりこんで三日間の祭典を連日連夜楽しむので、のべ数ではおよそ10万人が集う計算で、これを約790名（2011年度実績）のボランティア・スタッフが運営する。期間中は新旧のアニメ作品が上映され、アニメ業界のゲストのトークショーやサイン会が人気を集め、ファンが企画するさまざまのパネルにおいてアニメに関するテーマが議論され、夜も隣接するホテルでのゲーム・ショー等が真夜中過ぎまで人々を飽きさせない。千人を収容する近隣の船員会館（Mariner Arena）においてはマスカレード（コスプレ・コンテスト）や演奏会が花を添える。

豪華なゲスト・リストでも注目を集めるのが日本人の声優である。コアなアメリカのファンは、吹替えではなくオリジナルの日本人声優の声を聞きながら英語の字幕でアニメを見る。今年は平野綾（『涼宮ハルヒの憂鬱』のハルヒ）や柿原徹也（『聖戦士星矢』や『機動戦士ガンダム』シリーズ等。ドイツ生れでドイツ語と英語と日本語を話し、多言語アニメキャラのセリフもこなす）のトークショー会場は聴衆でいっぱいであった。サイン会は希望者多数のため抽選が行われ、涙をのんだファンも多かった。マッドハウスの丸山正雄はオタコンの大切な常連である。

フランスで開催されるジャパン・エキスポ（企業中心に運営）で韓国企業ブースの参入が報じられてきたが、オタコンでも今年初めてK-Popの男性6人組新人アイドルグループVIXXがゲスト出演をし、上保美香子のジャズ＆ポップと人気を分けた。アニメが各地で受容され、現地での創作活動が活発化している現状から、K-popに限らず今後さまざまの文化的背景をもつアーティスト達がこのグローバルな祭典に登場してくることは必然の流れであり、プログラムにいっそう豊かさを加えていくことが期待される。

アニメ・コンでは成人向けアニメは除外され、参加者のほとんどが若い男女であるにも関わらず問題（酒乱や喧嘩等々）を起さないことで知られ、中学生になって初めて友人同士で旅行する機会ともなっている。さらにオタコンの開催されるコンベンション・センターは通路で近接するシェラトン・ホテルやヒルトン・ホテルと連結されており、相互間の人の流れもスムーズで、空調もよく効いており、快適であった（コミケ参加者に苦行を強いる東京国際展示場の設備施設はもう少し改良できないものだろうか）。

オタコンは筆者がこれまでに訪れたアニメ・コンでもっとも居心地が良く、13名の幹部委員とボランティア・スタッフの心意気が随所で感じられ、10年余も参加し続ける人々にとって「帰っていく場」であることが痛いほど感じられた。ファン同士が丁寧に築き上げてきた家庭的な雰囲気の中で、アニメを中心に広がったグローバルな文化（ファッションや人と人との繋がり方等を含め）の独特の豊かさを、他の参加者と共に心から楽しむことのできる祭典であった。

最後に、日本支援（Japan Relief）として、今年のオタコンで3万8千ドル、昨年の6万5千ドルと併せて10万ドル（およそ800万円）以上が、オークションや寄付金として寄せられ、日本赤十字社に届けられたことを、感謝をこめて報告したい。

手作りの衣装で参加した高校生

OTAKONのコーディネーター達